

氏家 宏氏を悼む

猪郷久義



琉球大学名誉教授・日本古生物学会前会員氏家 宏氏は2006年4月26日永眠した。享年74歳であった。学界としてはさながら南天に燦然と輝いた巨星を失った感がある。葬儀はご家族と同門・同学が相集いしめやかに執り行ったと伺っている。私がこの訃報を知ったのは5月の半ばで、仙台の高柳洋吉氏から電話で知らされた。最も敬愛する先輩を失い、その夜は一人涕涙を禁じえなかった。

氏家さんは人も知る博雅の士で、新生代有孔虫化石の研究で多大の功績を挙げ、合わせて化石層位学、海洋地質学、構造地質学など地球科学全般にわたる幅広い分野で業績を残された。その研究・教育生活の大半を琉球大学で過ごし、理学部や海洋学科の創設など大学運営にも携わり、同大学の今日の発展の礎を築かれた。学会活動では1952年以来日本古生物学会、日本地質学会の会員として優れた論文をそれぞれの学会誌に発表すると共に、評議員、常務委員、執行委員などを歴任した。日本古生物学会からは1967年最優秀論文賞を、1974年には学術賞を授与された。さらに1996年には日本地質学会の学会賞を受賞した。私は僭越ながら同氏の斯学への偉大なる貢献を末長く後世に伝える事は課せられた責務と信じ、ご令嬢の氏家由里香さんから頂いた資料を基に、この稀有の逸才を育んだ学歴と、それを余す事なく活かした研究・教育活動の概要をここに紹介する。なお研究業績とその貢献については、同学の高柳洋吉氏が地質学雑誌の追悼に詳述する御意向と承知しているので、ここにはその輝かしい研究業績の一端を私なりの視点から紹介するとどめる。また彼の高潔な人柄もぜひ末長く伝えたい章句で、拙文中に随時付記する。

氏家さんは東京の山の手で生を受け、1931年、昭和6

年10月16日誕生した。長じて都立の名門上野高校で中等教育を受けた。地質学や古生物学を志す契機は同校の理科担当米山芳成教諭の薫陶によると、後年自身がしばしば語っていた。なお同教諭は上野高校に長く在職し、地学クラブを主宰し多くの「地学少年・化石少年」を世に送り出し教育界では夙に知られた方である。1950年同人は東京教育大学理学部に入學、迷う事なく地学科地質学鉱物学を専攻するが、その時点ですでに地質学の素養をかなり身に付けていた。当時東京教育大学には旧制の東京文理科大学が併設されていたが、氏家さんはその特別研究生福田 理氏の研究室に足繁く出入りし、同氏の薦めもあってか新生代有孔虫化石の研究にいち早く着手した。すでにこの時点で卒業論文の課題を決めていたというから驚く。そのテーマは当時京都大学槇山次郎教授によって樹立されていた東日本の第三系の標準層序の一つ、静岡県掛川・相良地域の新第三系を有孔虫化石層位学によって検討するという内容であった。彼は一年次生の春休みの段階で、精緻なフィールドワークに着手したというから、まさに「梅檀は双葉より芳し」であった。1954年学部卒業、東京教育大学大学院修士課程に進学、1960年3月博士課程修了まで大学院で研鑽を重ね、上記研究は後年大著となったが、大学院では同じ研究室や実験室で机を並べ、隣り合って顕微鏡をのぞき、同じ講義やセミナーを受けた。特に当時併任教授で月に一度仙台から来られる東北大学畑井小虎教授のセミナーは斬新で、2人ともその出講が待ち遠しかった。畑井教授は講義中さまざまな観点から議論を持ちかけ、個々の学生の研究内容について説明を求めては、仔細に講評した。さらに研究を英語論文にどのように仕上げるかなど、極めて具体的かつ論理的なサジェスションによる指導を惜しまれなかった。氏家さんは自分のフィールドワークの成果を基に、層序、層相変化、堆積学、化石帯、対比論など蓄積した学殖を披露して、畑井教授と活発な議論を展開した。ある日の夕刻、延々と続いた「畑井・氏家討論会」はこれで終了か一同セミナー室を引き上げたが、氏家さんがなかなか戻ってこない。小半時してセミナー室をのぞくと、まだお二人は机上に腰掛けて議論を続けていた。聞くと氏家さんが発表では全くふれなかった牧の原台地の地形の論議であった。卒論から大学院での数年に及んだこの相良一掛川地域の研究は学位論文となり、1962年に東京教育大学理科紀要 Ser.C, vol. 8に上梓された。題目は“Geology of the Sagawa-Kakegawa sedimentary basin in central Japan”で、65ページの大冊で、挿図などは芸術的でさえあった。この大著以前に大学院在籍中から小型有孔虫に関する画期的かつ独創的な研究成果、1956年修士課程修了時の2編、*Pseudocibicides* 新属の提唱、Elphidiidaeの殻室内部構造、ともに内外の有孔虫学者の衆目を集めた秀作である。氏家さんは学部時代からアテネフランセに通い、フランス語の習得に努めていた。大学院時代にはいつのまにか統計学など数理科学全

般を勉強して、その成果を有孔虫化石群集解析などに積極的に取り入れた。

大学院博士課程修了後、氏家さんは日本学術振興会奨励研究生、東京教育大学理学部助手などを経て、1962年から国立科学博物館研究官として勤務し、1978年琉球大学工学部教授として沖縄に赴任するまでの16年間は「大久保の科博」で研究三昧の日を過ごした。この間には第三紀小型有孔虫化石の研究はもとより、*Miogypsina* や白亜紀の *Orbitolina* などの大型有孔虫、更新世、完新世の材料まで幅広くカバーし、多くの論文や著作を次々と執筆した。公表される論文は年に数編は珍しくなく、その多くは新しい研究手法や視点を取り入れた佳作で、表紙に丁寧に名を記して送られてくる別刷は机上に山積する。氏家さんが学生時代から特に関心をもった有孔虫の殻構造の研究では、1965年と1966年に日本古生物学会報告・紀事に上梓された小型有孔虫 *Ammonia* と *Pararotalia* の研究“Shell structure of Japanese smaller foraminifera. Part 1. *Ammonia tochiensis* (Uchio); Part 2. *Pararotalia nipponica* (Asano)”が、1967年度の最優秀論文賞に輝いた。この論文で扱われた小型有孔虫は、殻の大きさわずか0.5 mm から1.5 mm で、外形だけでなくこれを薄片にしての観察で、図示された写真と詳細なスケッチは氏家さん天賦の器用さに因るところも大である。さらに取り扱った有孔虫の産状についても鋭い考究があって、殻の死後堆積時の淘汰作用の可能性を指摘し、彼自身の堆積学の素養が十分に生かされていた。なおこの年次の学会報告・紀事には同世代の秀作論文が数多く掲載されていたが、審査委員全員が躊躇する事なく氏家論文を最優秀論文に選んだと後日漏れ承った。

1960年代後半から1970年代半ばにかけての「科博の氏家さん」の研究は、日本学術振興会・日米科学協力計画やアメリカ科学財団による海洋底掘削計画に密接に関与する。この面の研究ではコロンビア大学、スクリップス海洋研究所など当時超一流の研究者との共同研究で、日本海、沖縄、フィリピンなどの海域の底質コアの解析に関連した論文が目立ち、まさに国際的な新進気鋭の研究者としての評価が高まった。さらに時をほぼ同じくして、小林貞一、鳥山隆三、橋本 亘諸氏が主宰した東南アジア地質・古生物研究にも氏家さんは積極的に参画し、その学殖は北ボルネオやフィリピンの浮遊性や底生有孔虫学に著しく貢献した。1973年には日本海の入口、対馬、朝鮮両海峡の浮遊性有孔虫殻の堆積、biostratigraphy に関する注目すべき研究成果を *Micropaleontology* 誌に公表した。また科博で長期にわたって継続的に行われた「日本列島自然史科学総合研究」のプロジェクトでも中心的な役割を果たし、関連した論文が国立科学博物館専報に多く上梓されている。科博から沖縄に赴任する直前の1975、1976年には学生時代の古戦場、相良、女神、静川などの中新世—鮮新世の浮遊性有孔虫の研究成果を国立科学博物館報告に詳述した。1970年代はプレート理論に関連して、世界の耳目は浮遊性

有孔虫による化石層位学に集まっていた。

氏家さんは1978年1月10日付けで琉球大学工学部教授として東京から赴任する。私はたまたまその前年の暮れ、転出の一ヶ月ほど前に氏家さんと二人で夕刻、杯を傾ける機会があり、その意向を聞かされた。私は即座にすでに科博に勤務して10数年、主任研究員として数々の顕著な業績をあげられ、その家庭生活も大変恵まれているのを抛っての遠隔の地への転職に危惧を抱いた。復帰後時を経ているとはいえ、琉球大学はまさに僻地の国立大学で、その研究・教育環境は劣悪とは言えないまでも、かなりひどい状態との風聞や、ご一家の生活環境も果たしてこの東京ボーイが適応できるのかと念を押した。氏家さんは「君が心配する研究・教育環境などは自分で創るものだよ。数年はかかるかもしれないがね」「十分に整ったら君にも講義に来てもらうよ、待っていてくれよ」と笑いながら私の肩をたたいた。10年余の後年ではあったが、はからずも氏家さんから海洋学科に博士課程設置の具体的なプランについての相談を持ちかけられ、琉球大学からの招へいと合わせて、集中講義の機会を与えて頂いた。その時点で琉球大学海洋学科氏家研究室は、最新の機器類で充実し、適切に整備されその研究・教育環境は本土の他大学と比較しても、遜色は無いどころか凌駕さえしていた。さらに招かれた瀟洒なご自宅は、氏家趣味とご令室のそれとが融合したものの、まさに南欧の邸宅風であった。氏家さんの18年間にわたる琉球大学での活躍はまさに「水を得た魚のよう」であった。自ら海人(ウミンチュ)としてモーターボートを操り、底質を採集する海洋地質学者であった。また調査船にたびたび搭乗し、学生諸君と沖縄の青く広い大海原の海洋調査を繰り返し、数多くの研究資料を蓄積された。また氏家さんは陸人(リクンチュ)のジオロジストも忘れてはいなかった。沖縄本島を始め点在する島々の露頭で、持ち前の卓越したフィールドワークとその慧眼によって、「陸」の地質学・古生物学研究も推進した。この時期の論文や著作には当然のことながら、育て上げた学生諸君との共同研究の「琉球物」が多くなる。このなかに琉球弧と本州弧との関連について、地体構造論の見地から極めて具体的に論究したものが目立つ。沖縄を中心とした有孔虫の研究も着々と進捗を重ね、さらに彼の微化石研究は、伊平屋島などのチャート層に及び、ペルム紀—ジュラ紀放射虫化石の発見につながった。氏家さんの研究には常に斬新な研究手法や機器を駆使した成果がみなぎっている。酸素や炭素などの同位体分析はいち早く自ら手がけ、成果をもたらすこともその一つで注目される。このように1980年代から1990年代にかけての氏家さんの研究成果は、まさに沖縄にいくつもの大輪の「花」を咲かせたようで、この間に100編以上の論文が内外の刊行物に上梓され、後世に残る珠玉編が数多くある。また氏家さんは平易な文体と適切な挿図による啓蒙書の執筆にも長じ、「琉球弧の海底—底質と地質」「沖縄の自然—地形と地質」などを著わして、地域文化の振興にも心くばりを怠らなかった。

ところで氏家さんほど豊富な海外研究の渡航歴をもつ研究者も珍しい。とくに関係する専門分野の国際会議には足繁く出席し、口頭発表はもとより、座長などをしばしば務められた。また内外の刊行物の査読者あるいは Editor としてその力量をいかんなく発揮した。特に Journal of Foraminiferal Research の Associate Editor は 10 数年余に亘っている。氏家さんの他大学への出講も多く国際基督教大学、千葉大学、九州大学、名古屋大学、新潟大学、筑波大学などに及んだ。その都度自らの最新の研究を主題とした講義で、その警咳にふれた学生はいずれも深い感銘を受けたと聞く。学会での各種委員の活動についてはすでに略記したが、関連する文部科学省などの委員としても手腕を発揮した。学術審議会専門委員、学術会議古生物研究連絡委員会委員、同海洋学研究連絡委員会委員、東京大学海洋研究所共同利用施設運営委員会委員、同協議会委員、国際深海掘削計画国内委員などをいそがしく歴任した。

かくして 1997 年琉球大学定年退職後、ただちに東京に戻り、自身の研究をつづけるとともに拓殖大学客員教授としても出講した。郊外から都心に通う途次、古巣の国立科学博物館地質部にしばしば立ち寄られた。私も同所で客員研究員の机を頂いていたので、いつになく頻りに面談の機会があった。話題は御自身の研究の進捗状況、いやその大半は御息・息女の近況と最近の研究成果で、目を細めて語っておられたのが強く印象に残っている。氏家さんの華麗な学風はこのお二人が相承し、ますます発展させるに違いない。

氏家さんは酒肴の嗜みはもとより、かなりの愛煙家でもあったが、心身はまさに壮健であった。しかし腫瘍の病魔は容赦なく定年退職直後の氏家さんの身体を襲った。最新のオペと抗ガン剤によって回復は驚くほど早く、更なる長寿をご本人も信じて居られたように見受けられた。事実病後の 70 歳を過ぎても壮衰など微塵も感じられ無かったし、この間もそれまでの多くの蓄積を基に、成果をつぎつぎと公表され恒太郎君と由里香さんとの親子共著がひときわ目に付く。また「陸の地質学者」氏家 宏の面目躍如たる地域地質研究報告、地調の図幅、伊平屋島および伊是名島地域の刊行も注目される。さらに遺稿となった那覇及び沖縄市南部地域、糸満及び久高島地域の 2 図幅が近く出版予定と聞き及んでいる。これらの図幅は半世紀前に氏家さんが卒論に添付した見事な色彩で塗色し名画の趣のあった地質図を彷彿とさせる出来栄えに違いない。

私事であるが、氏家さんと私は誕生日が全く同じで、丸一年違いである。最初に出会ったのはお互いに国民学校低学年の時、昭和 16 年の春ごろと記憶する。彼の御尊父は当時の鉄道省に勤務され、私の父と同僚で、一時期短期間ではあったが近くに住んだ。しかし学校は別々で、2、3 回道端で口をきく程度であった。氏家さん一家はほ

どなく転勤で転居されることになり、母上に連れられて氏家少年と妹さんが、お別れに私の自宅に立ち寄られた。その時の黒の半ズボンに編上靴の氏家少年は、西洋の童話の挿し絵に描かれた貴公子のように見えた。その 10 年後、東京教育大学大久保分室の構内（現在の国立科学博物館分館の敷地内）で、声をかけてくれたのは成人したその貴公子であった。氏家さんは眉目秀麗で学生時代から大変身嗜みの良いお洒落であった。当時は戦後間も無い時で、多くの学生の着衣は、継ぎはぎの詰襟の学生服か、米軍払い下げのだぶついた戦闘服姿が多かった。氏家さんはアイロンでプレスしたズボンに詰襟、金ボタンの学生服をきちんと着用し、角帽姿であった。大学院では当時の理系の学生の定番ユニフォーム、薄汚れた白衣の実験着は着用せず、最先端の G パンであった。大学院時代の髪は「慎太郎カット」に似たオリジナルの「宏カット」で、大学構内ではまずは見られない色鮮やかな暖色の Y シャツに、コーディネートさせたネクタイ背広姿で颯爽と登校する。この瀟洒な服装は後年ますます磨きがかかり、学会の雀共は日本古生物学会のベストドレッサーと評した。白髪が混じる頃はいち早く茶髪で変身した。このモボは他に追従を許さない素晴らしい家庭人でもあった。年頭に必ず頂く賀状には常に御自身と令夫人の近況、2 人のお子さんが成人されていく様子が細字でぎっしりと書き込まれていた。昨年と今年の賀状には、加えて御息の令室とお孫さんの様子も記されていた。

最近刊行されたある国際誌に著名な古生物学者の追悼文が目にとまった。その末尾は次のような形容詞が連なった賛辞の文で締めくくられていた。それをアルファベット順に並べ替えて見ると、ambitious, charming person, enthusiastic, hard-working とあって、さらに depicted as a romantic naturalist と結んでいる。この賛辞は氏家さんにもそのままフィットするが、彼に対しては何となく不十分の気がしてならない。abc 順に抜けているところを付け足して見よう。b は a brilliant mind か brilliant achievement か、d は無論 dandy, f は fashionable, g は gentleman と generous, いや genius としよう。h はどうしても handsome を付け足したい。i は innovative か intelligence 両方入れたいが、彼は常に a man of ideas でもあった。j は justice, k は knight, kind とあるが彼は常に with keen eyes であった。l は彼は稀に見る laborious scientist であった。m は magnificent, n は nice で neat, o は、彼は orderly であり、常に良き organizer であった。p は無論 prominent でいこう、q は qualified, r は romantic をそのまま頂こう。s は serious, superior, specialist, stylist どれも良い。紙面が尽きてきたようでもあり、乏しいボキャブラリーも底を付いてきた。この比類稀なる東京の山の手っ子、好漢惜しむべし。氏家 宏君安らかに眠れ。